『不死鳥と雉鳩』管見
―形而上的奇想との関連で―

川田　顯

I

シェイクスピア（William Shakespeare, 1564-1616）は，偉大な劇作家であると同時に，偉大な詩人でもあるということについては，論に俟つまでもない。事実，彼の劇作品は，時として散文が差し挟まれることはあるにせよ，その総てが，弱強五歩格の無韻詩（blank verse）で書かれている詩劇であることは周知のところであり，登場人物が発する台詞は，この詩の形式と深くかかわりあう詩的感受性に貫かれており，劇全体から切り離しても十分鑑賞に耐え得る優れた詩となっている場合が少なくない。その意味では，シェイクスピアが駆使する多彩で微妙な詩的心象を意識することなくして，詩の宝庫とも言えるシェイクスピアの戯曲を真に理解することはできない，と言っても過言ではあるまい。

シェイクスピアは，劇作家である前に，詩人として世に出た，と言われているが，確かに彼のあらゆる作品の内で，最初に出版され，世に問われたのは，詩篇『ヴィーナスとアドーニス』（*Venus and Adonis*, 1593）であるし，次いで出版された作品も詩篇『ルークリース凌辱』（*The Rape of Lucrece*, 1594）である。そして又，百五十四首からなる『ソネット集』（*Sonnets*, 1609）についても，既にこの頃かなりの数が書かれて，友人知己の間に流布され，読まれており，官能的感覚に訴える優れた詩人として世の称賛を受けていた，と考えられる[1]。

三十七篇の戯曲に加え，今日，シェイクスピアの作品とされている詩篇は，長短大小合わせて六種と考えられている。眷顧者サウサムプトン伯爵（The Earl of Southampton, Henry Wriothesley, 1573-1624）に献呈された二篇の物語詩『ヴィーナスとアドーニス』及び『ルークリース凌辱』，二十篇の短詩を集めた『多情の巡礼』（*The Passionate Pilgrime*, 1599）の中の少なくとも数篇の詩，チェスター（Robert Chester, 1566?-1640）の詩集『愛の殉教者』（*Loves Martyr*, 1601）の巻末に他の詩人の作品と共に添えられている『不死鳥と雉鳩』（*The Phoenix and the Turtle*），そして当時流行となっていた十四行詩連作の形をとっている『ソネット集』とその巻末に収録されている三百二十九行からなる『愛怨賦』（*A Lover's Complaint*）である。

これら六種の詩篇は，いずれも，シェイクスピアが劇作家として活動していた約二十年の間に出版されており，これらの詩篇で歌われている主題は，彼の劇作品の主題に呼応し，あるいは劇作品に組み込まれて具体的に展開されている，と言える。例えば，『ソネット集』において繰り返し歌われる「時」や「無常」という主題は，『マクベス』（*Macbeth*, 1606）や『リヤ王』（*King Lear*, 1605-6）に顕著に見て取れる主題であるし，又，清純にして類い稀な徳が巨大にして圧倒的な悪を前にして空しく潰え去るという『ルークリース凌辱』に見られる主題や悲劇形式が，『タイタス・アンドロニカス』（*Titus Andronicus*, 1594）においても繰り返されていることは疑うべくもない。

本稿で取り上げる『不死鳥と雉鳩』は，シェイクスピアの署名のもとに印刷，出版された詩篇ではあるが，戯曲，詩篇の別を問わず，シェイクスピアの全作品の中では，特異で異質な作品とされている。シェイクスピアが，如何なる経緯でもって，チェスターの『愛の殉教者』に寄稿したか未詳であることに始まり，この詩の趣旨については

議論百出の感があるとも言えるその主題の抽象性や多様な解釈の可能性，シェイクスピアの署名が付されてはいるものの贋作ではないかと思えるほどの異質性，謎めいた神託のような響きをもつ神秘性，不死鳥と雉鳩に込められた象徴，等々により，この詩が，小品ではあるが，難解，晦渋な作品とされてきたことは確かである[2]。

1950年代以降，『不死鳥と雉鳩』は，『ソネット集』等その他の詩篇の議論に加え，本格的な論議の対象となる[3]。その背景に，専ら詩を分析対象とし，詩を作り上げる要素としてパラドックス（paradox）やアンビヴァレンス（ambivalence），アイロニー（irony）等を指摘して，これらが詩の中に見事に配置されて統一のとれた有機体を形成し，十分に組織された全体あるいは内的統一性（tention）を保っていることを立証することに分析批評の目的を置いた文芸批評理論，「新批評」（New Criticism）の隆盛があることは，想像に難くない。このような批評理論にとって，強靱な論理が駆使され，奇想（conceit）がちりばめられている形而上詩は，当然のことながら，格好の分析対象となり，形而上詩の再評価が行われることになるが，『不死鳥と雉鳩』が一躍脚光を浴びることになった経緯も，この動向と無縁のものではない。例えば，プリンス（F. T. Prince）は，この詩に言及して，純粋で献身的な愛に対する共感の念をスコラ哲学風の用語を多用し歌い上げる等，漠としてではあるが，ダン（John Donne, 1573 - 1631）を思わせる形而上詩的な印象を与え，その手法もダンの恋愛詩の手法に極めて近いものがあるといった趣旨の発言をしている[4]。確かに，この『不死鳥と雉鳩』においては，中世の神学や新プラトン主義を想起させる用語や概念が駆使されて，愛し，愛される二羽の鳥，二人の恋人の共存と同一性，更には死における合一といった主題に力点が置かれつつ，愛の秘蹟が，正に呪文さながらの神秘性を帯びて，歌い上げられている。本稿においては，『不死鳥と雉鳩』において構築されている言わば自己充足的な一つの愛の世界及びその世界を根底において支えている論理を，形而上詩的特質という点に論を絞り，かつ，主として，ダンの作品と具体的に比較，検討することによって，分析を試みたい。

II

チェスターが，「不死鳥と雉鳩の純潔の運命に寄せて愛の真実を寓意的に暗示する」[5]という主題のもとに，『愛の殉教者』を出版し，ソールズベリー卿（Sir John Salisbury, 1567? - 1613?）に献呈したのは1601年のことであるが，その巻末に，シェイクスピアの『不死鳥と雉鳩』を含め，同時代の著名な詩人たち[6]による同一主題に基づく何篇かの詩が載せられている。

チェスターの詩そのものは，二羽の鳥の自己犠牲を中心に据えて，奇妙な魅力を備えた神話の世界を作り出してはいるが，詩的想像力に乏しく，又，詩に取り込まれている素材は，ローマ神話やアーサー王伝説，鳥獣寓意物語や植物誌，ケルトやイギリスの歴史に言及されるかと思うと，婦人の七徳や宝石に関する記述も含まれていて，正に寄せ集めの感があると言わざるを得ない。確かに，物語全体の枠組みは，基本的には，女神「自然」が，アラビアに住む美の象徴とも言うべき不死鳥が子孫を残すことなく死ぬのではないかという懸念から，男性である雉鳩を不死鳥に引き会わせ，この二羽の鳥は子孫を残すために死を共にする決心をし，身を焼いて死ぬことになり，そして，たまたまその場に立ち会うこととなったペリカンが，その目にした二羽の鳥の愛と死を伝えることを許される，というものである。しかし，徒に冗漫な脱線，逸脱が挿入され，作品全体としては，風変わりではあるが，乱雑にして弛緩，ばらばらの感があることは否み難い[7]。

このように，チェスターの『愛の殉教者』そのものは，優れた出来栄えの詩とは言い難いが，しかし，それにもかかわらず，各詩人の作品に不死鳥と雉鳩の愛と死という枠組みを与える役割を果たしていることは事実であるし，そして又，チェスターの詩に取り込まれている言わば種々雑多な話題が，寄稿した詩人たちに，作詩に際して，そ

の想像力を自由に駆使する幅を与えている，と言うことも出来る。シェイクスピアも，種々の神話に起源をもつとは言え，チェスターの発明によると思われる二羽の鳥の自己犠牲，一見不釣り合いとは思われるが奇妙に効果的である不死鳥と雉鳩の死における合一という表象を見事に自家薬籠中のものとし，その表象の中に，宮廷風恋愛詩やプラトニックな恋愛詩の伝統を取り込むことに成功している，と言える。確かに，シェイクスピアは，その詩の焦点を，二羽の鳥が死によって子孫を残すことにではなく，死そのものによって完成，成就される二羽の鳥の愛やその結合の崇高性に移し替える等，チェスターの詩とは全く趣を異にする創意工夫を凝らしているが，しかし，不死鳥と雉鳩の組み合わせについては，チェスターに拠っていることは疑うべくもない。

シェイクスピアの『不死鳥と雉鳩』は，十八連六十七行からなる短い詩である。構造的には二部からなっており，第一部は，abba と押韻される四行一連からなる十三連，第二部は，「哀悼歌」(Threnos) と題されて，単韻の三行一連からなる五連であり，いずれも強弱七歩格が主体となっている。

以上述べたように，この詩は，構造的には二部構造であるが，内容的には三部構成になっている，と考えられる。以下，Ⅲにおける具体的な分析，検討に先立って，『不死鳥と雉鳩』の梗概を略述しておきたい。第一部と考えられる部分は，第一連から第五連までである。詩人は，アラビアの地に一本しかない樹の上で一際声高に歌う鳥を先触れ役として，清らかな鳥たちを集めるが，死を予言する梟は列席を拒否され，鳥類の王たる鷲を除いて，猛禽類も参加を拒まれる。しかし，死者の冥福を祈る鎮魂歌を歌い，この不死鳥と雉鳩の葬儀の司祭を務める白鳥と共に，烏の列席は許される。次に，所謂「頌歌」(anthem) にあたる部分が第二部となり，第六連から第十三連までがそれにあたる。一つの焔に身を焼き，あの世へと去った不死鳥と雉鳩は，この世にあっては希有の愛を，即ち二つにして一つ，しかも二つでも，そして又一つでもない愛を成就したのである。このような正に奇蹟としか言いようのない愛と死の姿を目のあたりにした「理性」は，混乱の極に達し，鋭い叫び声をあげ，この二羽の鳥の悲劇の場面に対するコーラスとして，哀悼歌を捧げることになる。この哀悼歌としての最後の五連十五行が第三部にあたる。互いに余りにも純粋に純潔を守った結婚の故に，子孫を残すことがなかった不死鳥と雉鳩の死によって，この二羽の鳥が各々象徴する美も真理も共に失われ，埋葬されてしまったと歌われ，最終連において，真実な人々や美しい人々に対して，この二羽の鳥の灰を納めた墓に赴き，静かな祈りを捧げてほしい，という請願が行われ，この詩は結ばれている。

Ⅲ

第一部にあたる冒頭の二十行については，内容的にも，又，比喩の点から見ても，極めて明快であり，本稿が目的とする観点からは，取り立てて検討する必要はないと考えられるが，行論上，若干議論のある個所に言及しながら，その内容に触れておきたい。

この冒頭の部分においては，死んだ不死鳥と雉鳩の葬儀に列席することになる清らかな鳥たちが招集される様が歌われる。第一連において，招集の「先触れ役」を務めることになる「一際声高に歌う鳥」(“the bird of loudest lay” 1. 1) とは一体如何なる鳥であるのか，そして又，その鳥がとまっている「アラビアの地に一本しかない樹」(“the sole Arabian tree” 1. 2) の種類は何か，といった議論がある。例えば，ナイティンゲールではないかとする説[8]，あるいは，自分自身と雉鳩の葬儀に列席する再生した不死鳥であるとする説[9]等があるが，この鳥の種類については確定し難いというのが定説となっているし，プリンスの言うように[10]，声高に鳴ける鳥であるならば，如何なる鳥であろうと，「先触れ役」を務められると考えて，一向に差し支えあるまい。樹種についても，フロリオ (John Florio, 1553? - 1625) による定義[11]や『あらし』(*Tempest*) の一節[12]に言

及して議論が行われるが，「棕櫚」(palm) と解して問題はない。又，第四連

Let the priest in surplice white,
That defunctive music can,
Be the death-divining swan,
Lest the requiem lack his right.

における "his right" の意味をめぐって，例えば，"his" は "swan" を指すのか，"requiem" を指すのか，"right" の意味は "due" あるいは "rite" のいずれをとるべきか，といった問題，更には，第五連の「汝が吐いたり吸ったりする息で，汝の黒い子孫をつくるという，人間の三倍も長生きする烏よ」("… thou treble-dated crow,／That thy sable gender mak'st／With the breath thou giv'st and tak'st," 11. 17－19) をめぐる議論はある。しかし，"his right" については，その全体的な意味が，白鳥とその鳴き声は死者の冥福を祈る鎮魂歌には不可欠である，ということは明らかである[13]し，又，烏をめぐる議論についても，その出典，依拠にかかわる問題であって，その言及する内容が，詩全体の意味を左右するものとは考えられない。

以上，略述したように，第一部にあたる冒頭の部分は，用いられている比喩にせよ，詩的雰囲気にせよ，ある意味では，極めてシェイクスピア的であり，本稿が目的とする観点からは，取り立てて分析する必要はない。この詩が備えている形而上詩的特質とのかかわりで吟味が必要となるのは，主として，内容的に第二部にあたる頌歌の部分である。以下，具体的に，ダンの詩を引用し，比較，検討を行いたい。

頌歌にあたる部分は，第六連から第十三連まで，第二十一行目から第五十二行目までの計八連三十二行であるが，まず，現世にあって希有の愛を成就した不死鳥と雉鳩が，「互いに一つの焔となって現世を飛び去り」("… fled／In a mutual flame from hence" 11. 23－24)，この二羽の鳥によって象徴される純粋にして完全な愛と貞節はこの世からなくなってしまった，と歌い始められ，以下，その奇蹟とも言える愛の実体が説明されることになる。

この二羽の鳥は，相互に大変深く愛し合っていたので，この二羽の鳥における愛は，次のように歌われる。

… love in twain
Had the essence but in one:
Two distincts, division none;
Number there in love was slain.
(11. 25－28)

愛は，二羽の鳥各々に宿ってはいるが，その愛の実体あるいは本質とも言うべきものはただ一つであり，二つの異なったものではあったが，分割されたもの，あるいは離れ離れのものではなく，要するに，「二」とか「一」といった数の概念は，この二羽の鳥の愛においては抹消されていた，というのである。この一節で歌い上げられる純粋な愛の描写は，専ら知的，論理的な表現形式に依存しており，そこには，ルネッサンス的修辞法が駆使されて見事な均整を保ってはいるが，極めて感覚的であり，情緒的な色彩が色濃く滲み出ている『ソネット集』に見られるシェイクスピアに特有の抒情性は希薄である，と言わざるを得ない。例えば，この一節で用いられている "distincts" とか "division" という用語が，多くの批評家の指摘[14]に俟つまでもなく，スコラ派に由来することは明らかであるし，又，この一節において，シェイクスピアが，意識的に，スコラ哲学の牽強付会，曖昧にして晦渋な用語や議論を援用して，読む者の想像力をかきたてながら，一見矛盾撞着とも思える精神的な愛の神秘を歌い上げようとしていることは否定すべくもない。しかし，愛の世界を描くにあたって，「一」を強調する姿勢は，必ずしもシェイクスピアに特有のものではないし，「二であり一である」とか「二が一となる」という逆説も，決してシェイクスピアの創意になるものではない。「絶対的，天上的，超越的，そして純粋な一なるもの」を希求する姿勢は，ダンをはじめとして形而上詩人たちの詩に共通して見られる姿勢であるし，又，二人の恋人が二人でありながらも一人である，あるいは一人になってしまう，と

いう主題は，男女の理想的な愛を歌うダンの詩に頻出する主題の一つである，と言える。

この形而上詩人たちの詩を規定する特質の一つ「一」への執拗なまでの希求や，「多」が溶解しあってより次元の高い「一」へと止揚するという考え方は，ルネッサンス期の新プラトン主義に由来するものであり，ダンがこの形而上学をその恋愛詩に取り入れていることは，早くから指摘されているところである[15]。

アン（Anne More）と知り合い，結婚することによって得た霊的体験を歌ったと考えられる「目覚め」（'The Good-morrow'）において，ダンは，大航海時代の到来により，新しい世界が次々と踏破探検され，それまでの西欧中心の世界に異種の文化や事物が流入し，多様な世界の存在を意識せざるを得なくなった時代背景に触れつつも，それに対置させるかのように，愛し，愛される二人の心の中に，一つの全き愛の世界を深く探り求める。

Let Maps to others, worlds on worlds
　　have showne,
Let us possesse our world, each hath one,
　　and is one.
　　(11. 13−14)

「互いが一つの世界をもち，しかも一つの世界である」という矛盾は，この数行後で，じっと見つめ合う二人の顔が「半球」（"hemispheres" 1. 17）の形をなす互いの目に映り，二つの半球が合体して，完全な一つの球体，即ち全き一つの愛の世界を構築するのである，と説明される。次いで，この詩が，

What ever dyes, was not mixt equally;
If our two loves be one, or, thou and I
Love so alike, that none doe slacken,
　　none can die.

と結ばれるとき，よしんば，二つあるいは二人であるとしても，等しく愛し合い，完全に和していれば，「二」という数は問題ではなく，築き上げられる愛の世界は，正に数を超越した一つの不滅の世界となる，と歌われていることになる。しかも，この論理の背景に，そもそも神や魂のように一元的なものは分解，消滅することはないが，たとえ多元的なものであっても，その構成要素が等しく混じり合っているならば，永遠に生き続けることが出来るというスコラ哲学の考え方が窺える点も，シェイクスピアの詩の場合と同様である。この「二つでありながらも一つである」という考え方は，ダンの愛の哲学を述べた重要な詩とされている「聖列加入」（'The Canonization'）において，不死鳥の神秘に益々意味をもたせることになるのは，二つにして一つの愛の世界を構築した外ならぬ「二人でありながらも一つである我々」（"… we two being one ‥‥" 1. 24）である，と歌われる場合に，正に文字通り，見て取ることが出来る。他にも，例えば，ダンが，ドゥルアリー卿（Sir Robert Druary）に従ってフランスに旅立つ折に妻のアンに捧げたとされている詩篇「別れの歌ー嘆くを禁じて」（'A Valediction: forbidding Mourning'）において，「我々の二つでありながら一つの魂」（"Our two soules … which are one" 1. 21）と歌う場合や，「愛の無限性」（'Loves Infiniteness'）において，「愛の秘儀」（"Loves riddles" 1. 29）とは「我々二人が一つとなり，お互いの総てとなる」（"… wee shall／Be one, and one anothers All" 11. 32−33）ことである，と述べられる場合にも，正に同様の論理を読み取ることは容易であり，このような例は枚挙に遑ないところである。

『不死鳥と雉鳩』において，シェイクスピアは，前の連でいわば唐突に提示した「二ではあるが，同時に一でもある」という数の神秘と「異なったものではあるが，分離，分割されたものではない」という論法を，引き続き，更に押し進め，展開してゆく。

Hearts remote, yet not asunder;
Distance and no space was seen
'Twixt this Turtle and his queen:
　　(11. 29−31)

二羽の鳥の心は，離れていたが，分けられてはいなかった，と歌い，雉鳩とその女王即ち夫人であ

る不死鳥との間には，「距離」はあったが，「空間」は存在しなかった，と主張する。確かに，引き続き，「このようなことは，二羽の鳥の場合を除いては，一種の奇蹟となったであろう」（“But in them it were a wonder.” 1. 32）と歌われるように，極めて異常な現象と言わざるを得ない。しかし，ダンの恋愛詩を一読すれば，「離れてはいても，分割されることはない」ということは，彼がその恋愛詩において歌い上げる愛の諸相の中で，肉体や感覚等に依存する現世的，世俗的な愛を排し，プラトン的イデアとも言える愛の理想を具現する精神的な愛の世界にあっては，決して異様なことでも，珍しいことでもない，ということを容易に知ることが出来るし，そして又，肉体的には分離されていても，二人の間に介在する空間を超越し，魂が一体となっている男女の姿は，ダンの作品のそこここに見い出せる。

愛し合う二人の魂と魂が，肉体から脱け出して渾然と融合し，結合している状態を歌う「恍惚」（‘The Exstasie’）は，「聖列加入」と共に，愛の極致を，スコラ哲学に照らして，真摯に分析，描写したものと言われている[16]が，真に愛し，愛される男女にとって，「離れている」あるいは「空間が存在する」といった肉体にかかわる概念は，魂が合体するための初期の段階において一定の意味を付与されてはいるものの，恋愛の究極の理想像は，魂の合一にこそあるという形而上学が，繰り返し展開されることになる。魂が肉体から遊離することによってはじめて，新たな知覚力を備えることになり，それまでの愛にまつわる諸々の謎が解き明かされ，愛の本質が明らかになる，と述べられ，引き続き，

That abler soule, which thence doth flow,
　Defects of lonelinesse controules.
　　(11. 43−44)

と歌われるとき，二人の魂が結合することによって生ずるあのより強い一つとなった魂が，肉体的に離れ離れであることに必然的に伴う諸々の欠陥を克服することになり，見事に距離の超克[17]が行われていることになる。

「別れの歌ー嘆くを禁じて」において展開される有名な金箔やコンパスのイメージは，正に距離や別離の超克をその根底に据えている，と言える。単に感覚にのみ頼り，肉体に依存する俗世の恋人たちにとって，「分離」や「別離」は，必然的にその愛の構成要素を取り除くことになるので，到底許容し得ないものであるが，魂と魂が結び合い一体となっている我々の場合，旅により如何に遠く離れても，その結び付きは空間的な隔たりに左右されることはない，と詩人は歌う。

Our two soules therefore, which are one,
　Though I must goe, endure not yet
A breach, but an expansion,
　Like gold to ayery thinnesse beate.

If they be two, they are two so
　As stiffe twin compasses are two,
　　(11. 21−26)

妻は故国に残り，夫は遠くフランスの地にあろうとも，二人の魂は，打たれて無限に引き伸ばされ漂渺たる空気のような薄さにはなるが，決して引き裂かれることがない金箔のように，むしろただ拡大するだけで，切り離されることはない，と説く。更に，よしんば二つであるとしても，それは二脚で一つのコンパスという意味においてのみ二つということである，と述べられる。そして，引き続き，コンパスの機能は，二脚一体で，しかもその二脚がしっかりと頑丈に結合していてこそはじめて果たされ，理想的な愛の象徴となる完全な円を描き得るのである，と議論を展開して，二脚であることによって二人の間に横たわる距離や空間の意味が否定されることになる。これらダンの詩に見られる理想的な愛の姿は，正に「離れてはいても，その二羽の間に空間は存在しない」と歌われるシェイクスピアの雉鳩と不死鳥の関係と呼応するのみならず，その関係が更に具体的に敷衍，展開されたものと言える。

シェイクスピアは，次の第九連において，雉鳩が，不死鳥の眼の中に，「誠実に愛した自分が当然受けるべき愛のお返し」が燃え上がるのを見た，

と歌い，じっと見つめ合う二羽の鳥の眼に焦点を合わせる。

So between them love did shine
That the Turtle saw his right
Flaming in the Phoenix' sight;
Either was the other's mine.

愛し合う二人が，互いの眼の中に，自らの姿を投影し合い，同一化を図る姿は，ダンの恋愛詩において，基本的メタファーの一つになっていると言える。例えば，「絵姿による魔術」（'Witchcraft by a Pricture'）は，あまりにも激しく別れを嘆く女性の悲しみを紛らわせるための冗談の形でではあるが，「僕が眼を君の眼にじっと凝らすと，そこに写った僕の姿が，君の情熱の焔によって火炙りにされているので可哀想になる」（"I fixe mine eye on thine, and there／Pitty my picture burning in thine eye,"）と歌い始められているし，又，「目覚め」においては，「僕の顔は君の眼に，君の顔は僕の眼に現れる」（"My face in thine eye, thine in mine appeares," 1. 15）と歌われる。じっと見つめ合うことは，二人だけの完全に自己充足的な愛の至福の世界を構築するために，重要な役割を演ずることになる。

ダンの恋愛詩に宗教的な傾向を読み取ることが，とりたてて新しい視点ではなくなってから既に久しいものがあるが，確かに，「聖列加入」にしても「恍惚」にしても，そこで歌いあげられているエロスの世界にアガペーの世界を重ね合わせて読み解くことは極めて容易である。このように愛の秘儀と宗教的な秘儀が微妙な調和を保ち，かつ補完し合っていると考えられるダンの恋愛詩において，「眼」の演ずる役割が，ペトラルカ（Francesco Petrarca, 1304-74）等の恋愛詩におけるその常套的な役割以上のものとなっていることは，ある意味では当然のことと言える。「眼」や眼から発せられる光は，新プラトン主義においては，「一」へのあくなき希求と相関あるいは補完関係にあったと言える「多」への展開，即ち神の「放射」や「流出」という考え方[18]を見事に映し出す比喩であったからである。それ故，ダンは，例えば，「影に関する講義」（'A Lecture upon the Shadow'）において，太陽の光が地上に落とす二人の恋人の影法師が，午前，正午，そして午後と日が移るにつれて変化することに，愛の盛衰を重ね合わせて愛の哲学を説くが，その結論として，「真の愛は，輝きを増す朝の光，中天にとどまる真昼の光」（"Love is a growing, or full constant light" 1. 25）と歌うことが出来る。又，ダンの恋愛詩において詩人が語りかける相手の女性は，しばしば光り輝く天の眼，太陽になぞらえられて登場し，しかも多くの場合，実際の太陽以上のものとして歌われることになる[19]。それのみならず，「聖列加入」の最終連においては，愛の極致を極め，その死灰を巧みにつくられた遺骨甕に収められ，聖人の列に加えられた二人が，全世界を凝縮して映し出したのは，外ならぬお互いの「眼」そのものであり[20]，この眼は，最終行において「愛の原型」（"A patterne of your love !"）と歌われて，正に愛のイデアとも言うべきものとなり，球体をなす「眼」は，愛の世界においては，天上界を象徴するものに外ならない。そして又，「恍惚」においては，

And pictures on our eyes to get
Was all our propagation.
(11. 11－12)

と歌われ，二人の純粋な愛の永続，繁栄を果たす唯一の術は，眼を見交わして互いの眼の中に絵姿を宿すことにあった，と述べられることになる。『不死鳥と雉鳩』の第九連，最後の一行については，種々議論はあるが[21]，以上述べたダンの詩における「眼」の比喩や，シェイクスピア自身によるその前後の議論の展開を踏まえると，じっと見つめ合うことにより，雉鳩と不死鳥は，互いが互いとなっている，あるいは，互いに互いの存在となっている，と解されるべきであろう。

シェイクスピアの「二羽にして一つ，一つにして二羽」という議論は，次の第十連にも引き継がれる。

Property was thus appalled
That the self was not the same:

Single nature's double name
Neither two nor one was called.

雉鳩あるいは不死鳥という「個体」あるいは「単一体」は破壊されて，それ自体が元のそれそのものではなくなっており，その結果，愛の本質は一つであるからには二つのものとも言えず，さりとて，その一つの愛の本質を具現しているのはこの雉鳩と不死鳥という二羽の鳥であることも否定出来ない，と言う。

確かに，矛盾，相克ではあるが，しかし，このような逆説や多様な矛盾の止揚統一は，形而上詩の特徴の一つであり[22]，ダンの詩においても，頻出する。例えば，ダンの宗教詩においては，一つの全き神の愛が中心に据えられ，異なるものが一つになる様が，繰り返し歌われる。「病の折りに，我が主なる神に捧げる賛歌」('Hymne to God my God, in my sicknesse') においては，「死は復活に接している」("… death doth touch the Resurrection." 1. 15) し，又，「楽園と髑髏の丘は，全く一つのものであり」("… *Paradise* and *Calvarie*,／… stood in one place; " 11. 21−22)，「二人のアダムが私の中では一つになる」("… both *Adams* met in me" 1. 23) と歌われる。「二人のアダム」とは，アダムとキリストのことであり[23]，人間はアダムにより原罪を保持するが故に死を迎える運命にあるが，キリストの贖罪によって新生を与えられる，というキリスト教神学の根本的命題，死と生の止揚統一[24]が，相反する二者を結び付けることにより，見事に歌い上げられ，この詩は，「主は，人間が立ち上がれるようにと，打ち倒される」("… that he may raise the Lord throws down.") と結ばれるのである。悍ましく，悲しい人間の堕落ですら，神の祝福として受け入れようとする「幸運な堕落」(Fortunate Fall, *Felix Culpa*) という逆説も，キリストの降誕において示された受肉の神秘，即ち神の人間に対する無限の愛を確信することから生まれるのであり，このような神の愛を確信することにより，「正反対にして，かつ又対立するものであっても一つとなる」("… contraryes meete in one:" *Holy Sonnets* XIX, 1. 1) のである。宗教的な秘蹟においては，ただ一つの神の愛が多様な姿や事象のもとに顕示され，又同時に，総てがその一つの愛に収斂されることになる[25]が，理想的な愛の秘蹟においても，「自」は「他」となり，「他」は「自」となり，しかも，この「自」と「他」という二者は，究極的には，愛のもとに合体することになる。ダンが，1597年，アゾレス遠征の際の経験をブルック (Christopher Brooke, 1570-1628) 氏に書き送った書簡詩「嵐」('The Storme') の冒頭では，「僕である君（こんなことは特に驚くに当たらないが），そして常に君でもある君」("Thou which art I, ('tis nothing to be soe) ／Thou which art still thy self ····") と書き始められており，「君でもあり僕でもある君」という論理がごく当たり前のこととして展開されている。この詩においては，両者を一心同体に結び付けているのは，ダンとブルックの友愛[26]であるが，「君は僕であると同時に，君は常に君であるという個性をもつ」とする論理は，取りも直さずシェイクスピアの雉鳩と不死鳥の関係に外ならない。又，「別れの歌－窓に刻んだ我が名に寄せて」('A Valediction: of my Name in the Window') においては，名前のもつ神秘的な力を論理展開の拠所として，次のように歌われる。

But all such rules, loves magique can undoe,
Here you see mee, and I am you.
(11. 11−12)

貴女が窓ガラスに向かえば，貴女の姿がそこに写るというそんなありふれた常理などは，私が自分の名を貴女の部屋の窓ガラスに刻みつけ，自分の愛の堅さをこの窓ガラスに伝え移したときから，その愛の魔術によって簡単に打ち破られ，貴女がこの窓ガラスに向かったとき見るものは，貴女の姿ではなく，私の姿であり，しかも，その私の姿は，実は貴女自身なのである，と詩人は言う。確かに，ダン一流の読者を困惑させる論法の一つではあるが，しかし，この論法を支えているのは，外ならぬ愛の堅固さであり，その点にこそ，この論法を解く鍵がある，と言える。恋人同士が互い

に見つめ合うという代償的，相互的な視線の交換として愛が表現され，その愛の故に互いの主体が成立し，エロスの世界がアガペーの世界へと醇化するのである。以上，ダンの詩から若干例を挙げたが，そのいずれの場合においても，神の愛であれ，友愛であれ，男女間の愛であれ，愛によって，異種でありながらも同一化される，という論理がシェイクスピアの雉鳩と不死鳥の場合と同様に，その根底にあることは論に俟つまでもない。

『不死鳥と雉鳩』においては，この二羽の鳥に見られる見事な調和の姿が，引き続き歌われることになる。

Reason, in itself confounded,
Saw division grow together,
To themselves yet either neither,
Simple were so well compounded:

That it cried, How true a twain
Seemeth this concordant one!
(11. 41－46)

複合体を構成する「要素，元素，単体」が，極めて見事に「調合されていた」ので，元来分けられて別々であるべきものが一つになるが，しかしながら，両者は，いずれもそれそのものではなく，それだからと言って，又互いでもない，というのである。このような不可思議な状況を目の当たりにした「理性」は，混乱の極に達し，真なる番が成し遂げたやに思えるこの超越的な和解の姿に，驚嘆の叫びを上げざるを得ないのである。

確かに，理性では量り切れない不可解な事態ではあるが，しかし，ダンの詩においても，神秘的かつ永続的な愛の合一を達成するためには，愛し，愛される二人の構成要素が等しく混じり合い，和して調和を保つことが必要不可欠である，と繰り返し説かれている。既に引用した「目覚め」の一節では，「死滅するものは混合の調和を保っていないもの」と歌われているし，同様に，「恍惚」においては，「愛は，我々各自の既に混ぜ合わされて複合体となっている魂を更に混ぜ合わせ，渾然と融合した単一体となし，各自の魂は同時に男性と女性の魂となり，両性を具有する全きものとなる」（"Love, these mixt soules, doth mixe againe,／ And makes both one, each this and that." 11. 35－36）と歌われる。更に，愛する相手の女性の死を，自分も亡き彼女の後を一刻も早く追いたいと願う気持ちと共に，スコラ派の説く地水火風の四元素論に因んで，悼み歌われる「分解」（'The Dissolution'）においては，彼女が生きていたときは，「私は彼女を形作る元素，彼女は私を形作る元素であって，我々二人は相互を材料として作られていたのである」（"… we were mutuall Elements to us, ／ And made of one another." 11. 3－4）と歌われて，愛の秘儀にあっては，魂のみならず，正に霊肉共に渾然一体となっている，と述べられ，そして又，『悲歌』(*Elegies*) の一つ，「愛の成長」（'Loves Progress'）においては，ダンは，「完全は調和にこそある」（"Perfection is in unitie;" 1. 9）と喝破するのである。

シェイクスピアは，二羽の鳥，不死鳥と雉鳩が成就した愛の神秘を，

Love hath reason, reason none,
If what parts, can so remain.
(11. 47－48)

と歌って結んでいる。分かれているものがこのように調和して，一つのものであり得る場合には，愛の方にこそ道理があるのであって，正しかるべき理性といえども，愛の秘蹟にあっては道理足り得ない，と言うのである。

ダンが，『第一周年追悼詩；世界の解剖』(*The First Anniversary; An Anatomie of the World*) において，「新しい学問が総てのものを疑わしいものとする」（"And new Philosophy calls all in doubt," 1. 205）と歌ったように，第十七世紀は，モンテーニュ（Michel Eyquem de Montaigne, 1533-92）の懐疑的精神や新天文学の勃興等の影響を受け，懐疑，内省，自意識の傾向が顕著に現れはじめた時代であり，やがて来るべき理性の時代の幕開けとも呼べる時代であるが，同時に極度に信仰心の高まった時代でもある。大陸から流入

した「新哲学」や，演繹的方法の不備を指摘して科学的研究と実験に基づく経験的帰納法の価値を主張するベーコン（Francis Bacon, 1561-1626）等の影響により，神と自然を明確に区分し，信仰の領域を宗教にのみ限定し，自然を挙げて理性に委ねようとする一方で，人々を熱狂的に宗教改革に駆り立てる力をも備えており，正に信仰と理性が併存する時代，あらゆる面で新旧の対立，混乱が見られる過渡期であり，極めて不安定な時代であった，と言えるのである。このような時代に生きた形而上詩人たちの詩，とりわけ宗教詩は，この信仰と理性の葛藤が惹起する緊張感に満ち満ちている，と言っても過言ではない。不可測な神の愛と言わば局限された人間知の狭間にたゆとうて，絶えざる自己崩壊と解体の危機に苛まれながら，神の愛を希求する姿勢は，形而上詩人たちに共通して見られる特徴である[27]。

ダンは，『ホーリー・ソネッツ』の第十四番において，「ああ，私にあっては主の代理を務めるはずの理性は，私を守るべきなのに，虜囚の身に成り果てて，頼りなく，私を裏切っていることが分かりましたが，しかし，私は心から主を愛し，主に愛されたいと切望するのです」（"… Oh, to no end,／Reason your viceroy in mee, mee should defend,／But is captiv'd, and proves weake or untrue,／Yet dearely' I love you, and would be lov'd faine," 11. 6－9）と歌い，理性に救いを求めることが出来ぬままに，無知と汚辱に塗れた自らの魂の救済を，神の愛に身を託し，神の愛に専ら収斂することによって，希求するのである。

シェイクスピアの詩において，不死鳥と雉鳩による愛の神秘が高らかに歌い上げられ，その謎を解くにあたって，「理性」がその場を「愛」に譲らざるを得なかったということは，正に理性と信仰の背反，相克を，神の愛によって解消しようと努めた形而上詩人たちの宗教詩における姿勢と軌を一にするものであるし，更に，この二羽の鳥に託されたエロスの世界がアガペーの世界に昇華されたことをも物語るものである，と言っても過言ではない。

シェイクスピアの作品においては，以上で，不死鳥と雉鳩が成就した世にも希有な純愛にまつわる物語には終止符が打たれ，以下，「愛の共同支配者であり，愛の星である」（"Co-supremes and stars of love," 1. 51）この二羽の鳥の死に対して，「理性」がコーラスの役割を演じ，エピローグとしての哀悼歌を捧げることになる。この第三部にあたる哀悼歌の部分においては，第一部の場合と同様に，とりたてて分析を必要とする比喩等は特に用いられていないが，「全く純真無垢な恩寵」（"Grace in all simplicity" 1. 54）であるとか「死は今や不死鳥の塒」（"Death is now the Phoenix' nest." 1. 56）等，形而上詩的な趣のある表現や用語，更には，ダンの詩を連想させる歌い方は見い出せる。例えば，第十七連において，

Truth may seem, but cannot be:
Beauty brag, but 'tis not she;
Truth and beauty buried be.

と歌われ，美の化身である不死鳥と真理の化身である雉鳩の死によって，この世から美と真理が永遠に失われた，と述べられる。この一節は，チェスターの馬鹿げてはいるが，しかし魅力に富む神話に，シェイクスピアが想像力をかき立てられ，変わらぬ愛に歓喜して，純粋で献身的な愛に対する強い共感の念を歌い上げるが，やがて訪れる宿命的な死の安らぎに対する渇望とも結び付けられて，和解と調和の達成を希求しつつも，喪失と悲嘆の想いを吐露したものである，と考えられる。短くはあるがこの一連に見られるシェイクスピアの姿勢に，ドゥルアリー卿の一人娘，十五歳にも満たない少女エリザベスの死によって，世界は病み衰え，死んだので，その世界を解剖し，そこから何を学び得るのか知ろうという，追悼詩としても桁外れの雄大な構想と途方もない誇張，壮大さを備えた『第一周年追悼詩』に見られるダンの姿勢を重ね合わせて読んだとしても，必ずしも牽強付会とは断じ切れないものがあることは確かである。四百七十四行にも及び，世界の魂であったエ

リザベスがこの世を去ることにより，残された世界はばらばらに分解されてしまったと議論を展開するダンの詩と，二羽の鳥の死によって美と真理がこの世から滅んでしまったとするシェイクスピアの詩は，量的には勿論のこと，その力強さや論理の強靱さにおいては比ぶべくもないが，しかし，エリザベスあるいは二羽の鳥の死によって，世界が崇高で絶対的な美や真を失うという両者の詩の基本的な構想や論理の組み立てに，共通するものがあることは否定出来ない。

シェイクスピアの『不死鳥と雉鳩』の最終連は，

To this urn let those repair
That are either true or fair:
For these dead birds sigh a prayer.

と結ばれる。美と真理を象徴する不死鳥と雉鳩は，焔に身を焼き，灰と化して，この遺骨甕に収められ，不死鳥は死の塒に就き，誠実な雉鳩も永遠の憩いに就くことになる。しかも，この二羽の鳥は，「余りにも純潔を守った結婚」（"It was married chastity." 1. 61）の故に，子孫を残すことがなかったので，正に美と真理のイデアは永遠にこの世から消失してしまったのであるが，しかし，それを求める世の人々は，この甕に赴き，祈りを低く捧げることによって，真の意味での美と真理を具現出来る，と述べられることになる。この結びの一連を読むとき，ダンの「聖列加入」と同じ響きを耳にすることは，極めて容易なことである。愛し，愛される二人の恋人は，白熱消滅し，結合，調和を遂げ，一個の聖なる完全体になるという愛の神秘を成し遂げた業績によって，聖人として祀られることになるが，この二人の死灰が収められるのは，不死鳥と雉鳩の場合と同様に，「巧みにつくられた遺骨甕」（"a well wrought urne" 1. 33)[28] であるし，そして又，「聖列加入」の最終連も，嵐のような激しい肉欲に苛まれることなく，愛により精神的な安心立命の境地を達成するという奇蹟を成就した二人に対して，世の人々が，愛の典型を求めて祈りを捧げることで結ばれているのである。

Ⅳ

『不死鳥と雉鳩』は，シェイクスピアの全作品の中で，贋作と疑われるほどの異質性を備えた特異な作品と言われ，創作の経緯からすると一種の課題詩とも言えるこの詩については，難解な珍品，晦渋な小品，透明な謎といった批評が寄せられてきた。しかし，問題とされてきた個所，主として，内容的には第二部，頌歌にあたる部分であるが，第六連から第十三連までについて，ダンの詩と具体的に比較，検討すると，そこには顕著な類似性が認められ，必ずしも，難解，晦渋，神秘的で，分析を受け付けないような作品である，とは言い難く，『不死鳥と雉鳩』の「謎」とされてきた部分，少なくとも，二羽の鳥の愛の実体とそれを支える論理については，十分解明出来ると言っても過言ではあるまい。

シェイクスピアの作品は，一般的に言えば，抒情性豊かで，主知的というよりむしろ情緒的であり，用いられる比喩も説明的，描写的であることは確かである。それ故，シェイクスピアが，その中心となるべき部分において，過度に知的，論理的であるのみならず，抒情性に欠けるとも思える『不死鳥と雉鳩』のような作品を書いたことに，首を傾ける者が居ても必ずしも不思議ではない。しかし，シェイクスピアは，必要があれば，例えば，『ルークリース凌辱』や『ソネット集』におけるように，随所に，形而上詩人さながらの奇想をちりばめることが出来るし，又，『トロイラスとクレッシダ』（*Troilus and Cressida*）においては，ユリシーズ（Ulysses）に，位階や秩序について極めて強靱で首尾一貫した見事な論理[29]を展開させることも出来るのである。その意味では，『不死鳥と雉鳩』についても，その異質性を過度に強調し，徒に神秘のヴェールで被うことは避けるべきであろうし，ダンの作品との比較，検討によっても明らかなところであるが，様々な問題を孕んでいるという点では正に前近代と言うべきルネッサンス，理性と信仰がせめぎあい，特有の精神風土を形成していた時代を背景として，『不死

鳥と雉鳩』も検討されて然るべきと考える。

『不死鳥と雉鳩』で歌われる愛の世界とそれを支える論理が，ダンの作品の場合と重なり合うことについては，既に検証したところであるが，しかし，主題としての類似，あるいはスコラ哲学の論理を踏まえた形而上詩的な比喩の使用という，いわば表面的な類似にのみ留まることなく，更には，この『不死鳥と雉鳩』という作品も又，シェイクスピアとダンが生きた時代の様々な言説のより深い緊張関係を表象，再現した作品となっているという意味で，類似性が見い出せる，ということである。

シェイクスピアは，いわば百科辞典的な情報量に裏付けられ，形式的には抒情的，非論理的で，内容的には知識，理性で統括することと引き換えに，この『不死鳥と雉鳩』を書くにあたっては，形式的には論理の展開を手中にし，内容的には理性に狂気を与えることにした，と言うことが出来る。理性に対するこの矛盾した態度は，一見すると牽強付会な比喩を駆使して，読者を混乱の極に陥れ，読者の理性を嘲笑するかに思える態度をとりつつも，強靭な論理の敷衍，展開によって，緊密に構成されているダンの詩にも読み取ることが出来る。ダンの場合，スコラ派の哲学や新プラトン主義に裏付けられたこの論理は，やがて，宗教家，宗教詩人として，キリスト教神学，神の論理へと姿をかえてゆくが，シェイクスピアの『不死鳥と雉鳩』の場合も，その作品全体としての展開，とりわけ結びの一連を見る限り，同様の役割を演じていると考えられる。

ティリヤード（E.M.W.Tillyard）が描き出すエリザベス時代の世界像[30]は，確かにそれなりの説得力を今なお秘めているが，しかし，シェイクスピアとダンの生きた時代の世界像を特徴付けるものとして，理性と狂気，作品に即して言えば，論理と愛の狭間にたゆとう主体のゆらぎという観点も又，看過し得ないことは確かである。両者の作品に共に描かれている愛するもの同士の眼や視線の議論は，「見るもの」と「見られるもの」との関係をその根底に据えているが，この関係は又，「故意に見られるもの」と「見せられるもの」と言い換えることも可能であり，このことによって一つの社会機構における力関係が，視線という問題を通して，より一層浮き彫りにされることになる，と考えられる。更に，相手の眼や窓ガラスを鏡として，自己の姿を映し出す描写は，その行為によって己の存在を確立する，主体形成の段階と考えることが出来る。相手の眼，あるいは窓ガラスに映る像を自己と同定する行為は，シェイクスピアにおける二羽の鳥の場合も，ダンにおける二人の恋人の場合も，正に「二つにして一つ」となるためには，必要不可欠とも言える前段階となっていることも指摘しておきたい。そして又，両者の詩にあって，共通している点は，いずれも一種の合わせ鏡の状況になっている，ということである。即ち，お互いが「見るもの」であり，同時に「見られるもの」でもあるという相互補完的な主体になっており，いずれか一方が視線を逸らすと，その瞬間に，両者の主体が崩壊する，という状況である[31]。このような状況にこそ，シェイクスピアとダンの詩において，眼や眼差しが，「二つにして一つ」という考え方に組み合わされる論理的必然性があり，このような主体論も又，両者に共通して見い出せる，と言うことが出来る。

主題や比喩といったいわば表層的な面からだけではなく，シェイクスピアとダンがその詩作の筆を採った時代の根底に横たわるこのような主体のゆらぎの表象という観点から，両者の詩に見られる類似性をとらえるなら，シェイクスピアが『不死鳥と雉鳩』のような詩を書いても一向に奇怪，不審なことではあり得ないし，又，その内容についても，徒に神秘的で，謎めいているということにはならない。『不死鳥と雉鳩』は，ダンの詩の場合と同様に，愛という主題と論理の狭間にたゆとう主体成型の過程を，「二つにして一つ」，あるいは「空間を超越する繋がり」という概念で表現しようとしているのであるが，その意味では，正にこの時代の精神風土を読み取ることが出来る作品であり，この時代に最も相応しい作品と言っても過言ではない。

シェイクスピアは，『不死鳥と雉鳩』を書くにあたって，チェスターの，ある意味では，冗漫，乱雑，ばらばらとも言える作品を意識して，形式的には短く，内容的には論理を優先させることにその主眼を置いた節が窺える。それ故，ダンの作品と比較する場合，シェイクスピアの作品は，論理的には単純，明快でありながらも，他の作品に一般的に見受けられる特徴であるが，一つの概念が繰り返し説明される敷衍，展開に欠けているという憾みは払拭し難い。例えば，不死鳥と雉鳩が死ぬことにより，この世から美と真理が消失したと歌っても，それ以上の展開はなく，少女エリザベスの死を世界の崩壊に関連させて歌うダンの執拗な論理展開とは甚だしく異なっている。勿論，『第一周年追悼詩』とは，量的に圧倒的な開きがあるので比較するには問題があるかも知れないが，しかし，『不死鳥と雉鳩』より短い詩においても，ダンが，二重三重に論理の網を巡らせ，しかも相互に緊密な整合性を保たせながら展開してゆき，結論へと導くことが多いのは確かである。『不死鳥と雉鳩』を見る限りにおいてではあるが，シェイクスピアの場合には，短さと説明不足による謎があり，ダンの場合には，同じ主題を歌う場合にも，往々にして，長さと説明過多による謎が付き纏っている，と言うことは出来る。ともあれ，一概に，いずれを良しとするかは別問題として，両者の論理に対するこのような態度の相違に，過度に純粋論理を追求することなしに，人間感情の深奥を極めようとする，当代の人気を一身に集める劇作家としてのシェイクスピアと，恋愛詩から宗教詩，そして説教へと移行しつつ，その論理性を深めてゆき，やがて英国国教会の聖職者として最高峰とも言うべき地位に上り詰めることになるダンとの方向性の違いを読み取ることは，必ずしも的外れではあるまい。このようなシェイクスピアとダンの間に見られる差異を秘めた類似に，『不死鳥と雉鳩』の謎を解く鍵が象徴的に示されている，と考えることも出来る。

最後に，シェイクスピアとダンは，様々な不安や矛盾を懐胎し，現代文明が悩む分裂と解体の萌芽が既に垣間見えるルネッサンスという精神風土の中で，主体性を確立しようとして苦闘，呻吟した二人の巨人であり，少なくともルネッサンスという一大山塊の数ある巨峰の二つを形成していることは確かであり，その意味では，正に『不死鳥と雉鳩』における二羽の鳥のように，「二つでありながらも一つ」のものとして，相互補完的に二人の生きた「時代精神」を形作っていたと述べて，結びとしたい。

〔付記〕本稿において使用したテキストは，*The Poems*, ed. F.T.Prince (London: Methuen, 1960), John Donne, *The Elegies and The Songs and Sonnets*, ed. H.Gardner (Oxford: Clarendon Press, 1965), *The Divine Poems of John Donne*, ed. H.Gardner (Oxford: Clarendon Press, 1964) 及び*The Poems of John Donne*, ed. Herbert J.C.Grierson, 2 vols. (Oxford: Clarendon Press, 1912) である。

〔註〕

[1] F.Meres, *Palladis Tamia: Wits Treasury* (1598).'…the sweete wittie soule of *Ouid* liues in mellifluous & honey-tongued *Shakespeare*, witnes his *Venus and Adonis*, his *Lucrece*, his sugred Sonnets among his priuate friends, &c.' in F. E. Halliday, *A Shakespeare Companion 1550-1950* (London: Gerald Duckworth, 1952), p. 407参照。

[2] 最近になっても，この詩の解釈を巡る議論は尽きない観がある。例えば，J.Constable, "*The Phoenix and the Turtle*: 'Either was the other's mine'－A New Reading", *Notes and Queries* 36 (1989), p.327, L.Marder, "The Phoenix and the Turtle: Another Unsolved Mystery", *Shakespeare Newsletter* 39 (1989), pp. 40－42等，参照。

[3] 例えば，G.W.Knight, *The Mutual Flame* (London: Methuen, 1955), W.H.Matchett, *The Phoenix and the Turtle* (The Hague: Mou-

ton, 1965), W.Empson, *'The Phoenix and the Turtle'*, *Essays in Criticism* XVI (1966) 等, 参照。

[4] Introduction. *The Poems* (London: Methuen, 1960), xliii-xliv 及び W.Empson, *Some Versions of Pastoral* (London: Chatto & Windus, 1935), p.139等, 参照。他にも, 例えば, P.Biltonは, "Graves on lovers, and Shakespeare at a lovers' funeral", *Shakespeare Survey* 36 (1983), pp.39－42において, 形而上詩との関連を指摘しており, 又, R.T.Eriksenは, '"Un certo amoroso martire": Shakespeare's "The Phoenix and the Turtle" and Giordano Bruno's *De gli eroici furori'*, *Spenser Studies* 2 (1981) において, 「対立物の一致」等を説くブルーノの学説に言及し, この詩との関連を説明している。

[5] A.B.Grosart, ed., *Robert Chester's "Loves Martyr, or Rosalins Complaint"* (1601) (London: N.Trübner, 1878) の扉に '*Allegorically ſhadowing the truth of Loue,* / in the conſtant Fate of the Phoenix / *and Turtle.*' とある。

[6] シェイクスピアの『不死鳥と雉鳩』以外で寄稿されている作品は, 「詩人たちのコーラス」(*Vatum Chorus*) 及び「無名氏」(*Ignoto*) によるもの, 署名が付されている作品としては, マーストン (John Marston, 1576-1634), チャップマン (George Chapman, 1560?-1634), 及びベン・ジョンソン (Ben Jonson, 1572-1637) のものがあり, いずれも不死鳥と雉鳩の愛と死を歌ったもの, あるいはそれに関連するもので, シェイクスピアの作品は五番目に置かれている。

[7] C.K.Pooler, *Shakespeare's Poems* (London: Methuen, 1911), pp.lxxxvii-lxxxviii, 及び Prince, p.xl 等, 参照。従来の批評家, とりわけ「新批評」の系統に属する批評家は, 簡潔にして凝縮されたシェイクスピアの詩と比較して, チェスターの詩を, 主題的に雑多, 乱雑であり, 脱線や逸脱が多いと指摘して, 批判的に扱うのが常道であるが, 「異種混交」(heterogeneity) の背後に現実の世界の実相を見て取ろうとする観点に立てば, チェスターの詩が再評価される可能性を秘めていることも看過さるべきではない。

[8] Grosartの註, 参照。

[9] Knight, pp. 202－4.

[10] Prince, p. 179.

[11] "*Rasin*, a tree in Arabia, whereof there is but one found, and upon it the Phenix sits."

[12] Ⅲ.iii.23 ff. "… that in Arabia / There is one tree, the phoenix' throne; one phoenix / At this hour reigning there."

[13] Prince, p. 180.

[14] 例えば, M.R.RidleyによるNew Temple版 (1935) の註等, 参照。他にも, F.Kermodeは, その著 *Shakespeare, Spenser, Donne* (London: Routledge & Kegan Paul, 1971), p. 197において, この個所の議論にスコラ派の「三位一体」の議論を重ね合わせて検討しているし, 更に, シェイクスピアの『不死鳥と雉鳩』全体の背後に, アキナス (St. Thomas Aquinas, 1225-74) の著書『神学大全』(*Summa Theologica*) の影響を見ている。

[15] 例えば, M.Y.Hughes, 'Some of Donne's "Ecstasies"', *PMLA* LXXV (1960), pp.509－18 や F. J. Warnke, *European Metaphysical Poetry* (New Haven: Yale University Press, 1961), p.8 等, 参照。

[16] Sir Herbert J.C.Grierson, *Donne's Poetical Works* (Oxford: Clarendon Press, 1912) を参照。しかし, 例えば, P.Legouis は, その著 *Donne the Craftsman* (New York: Russell & Russell, 1962) において, この詩がダンによる愛の哲学の真摯な議論であるとすることには疑問を呈している。

[17] 因に, H.Gardner が, John Donne, *The Elegies and The Songs and Sonnets* (Oxford: Clarendon Press, 1965) に付した "Defects of lonelinesse controules" の註は "ovecomes the imperfections of separateness" である。

[18] A.O.Lovejoy, *The Great Chain of Being* (Cambridge: Harvard University Press, 1960),

p.62 等，参照。

[19]例えば，「最も短い日，聖ルーシーの日に寄せる夜の歌」('A Nocturnall upon S. Lucies Day, being the shortest day') においては，死んだ相手の女性が"my Sunne"と呼ばれ，実際の太陽は"… the lesser Sunne ／ … is runne ／ To fetch new lust, and give it you." (11. 38－40) と歌われるし，「餌」('The Baite') においても，太陽よりも強い光をもつ相手の女性は"If thou, to be so seene, beest loath ／ By Sunne, or Moone, thou darknest both, ／ And if my selfe have leave to see, ／I need not their light, having thee." (11. 13－16) と歌われている。

[20]"Who did the whole worlds soule extract, and drove ／ Into the glasses of your eyes" (11. 40－41) .

[21]Prince, pp. 181－82, Constable, p. 327等，参照。

[22]この点については，その著書『知ある無知』(*De docta ignorantia*) で「対立物の一致」(*coincidentia opppositorum*) 等を説くクザーヌス (Nicolaus Cusanus, 1401-1464) の影響は否定出来ないし，又，逆説の伝統については，R.Colie, *Paradoxia Epidemica: The Renaissance Tradition of Paradox* (Princeton, N.J.: Princeton University Press, 1966) に詳しい。

[23]アダムは "the first Adam",キリストは"the last Adam"又は"the second Adam"と呼ばれる。*I Corinthians*, xv. 45等，参照。

[24]他にも，『ラ・コロナ』(*La Corona*) の六番，「復活」('Ressurection') や『ホーリー・ソネッツ：聖なる黙想』(*Holy Sonnets: Divine Meditations*) の第六番があるし，又，ハーバート (G.Herbert, 1593-1633) の「死」('Death') や「対話アンセム」('A Dialogue-Antheme') においても，死と生の対立が，キリストの降誕に示される神の愛により，止揚統一されている。

[25]このような形で神を把握しようとする考え方は，形而上詩にあっては特異なものではなく，例えば，クラショー (R.Crashaw, 1612?-49) が，偽ディオニシュウス・アレオパギタ (pseudo-Dionysius Areopagita) による『神名論』(*De divinis Nominibus*) を踏まえて書いた「あらゆる名の上にある名，イエスの名に寄せて」('To the Name above Every Name the Name of Jesus') 等に顕著に見られる。

[26]ブルックは，ダンのリンカン法曹学院時代からの無二の親友であり，ダンの秘密結婚式においては，花嫁の父親代わりを務め，そのため投獄される等，ダンとは生涯浅からぬ関係にあった人物である。

[27]例えば，ハーバートの「虚栄一番」('Vanitie I') や「ヨルダン二番」('Jordan II')，ヴォーン (H.Vaughan, 1621／2-95) の「世界」('The World') や「人間」('Man')，マーヴェル (A. Marvell, 1621-78) の「花冠」('The Coronet') や「一雫の露に寄せて」('On a Drop of Dew') 等，参照。

尚，D.K.Shugerは，*Habits of Thought in the English Renaissance* (Berkeley: University of California Press, 1990), pp. 159－217において，混沌たる世界にあって，苦闘，呻吟しつつも，最終的に神の愛に救いを求めるダンの姿勢と，当時の政治的状況を重ね合わせて，詳細に考察している。

[28]ただし，ダンの詩の場合，実際の甍ではなく，二人の愛の実相が歌われているダンの詩そのものを指して，「甍」と言っている。

[29]例えば，I. iii. 85ff.等，参照。

[30]*The Elizabethan World Picture* (London: Chatto & Windus, 1943) .

[31]W.Shullenberger は，"Love as a Spectator Sport in John Donne's Poetry" in *Renaissance Discourses of Desire* (Columbia: University of Missouri Press, 1993) eds. C.J.Summers and T.Pebworth, pp. 46－62において，恋人同士の愛の営みを，二人の間に交わされる視線という観点から分析し，とりわけ「見るもの」としての観察者と「読むもの」としての読者を重ね合わせ，ダンの詩の読者論的分析を試みている。

Shakespeare's *The Phoenix and the Turtle* with Special Reference to Its Metaphysical Conceit

Akira KAWATA

The traditional controversy over *The Phoenix and the Turtle* can be said to be focussed not only on its poetic style quite different from that of Shakespeare's other works, but also on its inspiring theme of mysterious, enigmatic, criptic love of the birds, together with its logic, compression, and verbal wit. In this paper, the world of self-contained love depicted in *The Phoenix and the Turtle* and the logic which solidifies the foundation of the curious, uncanny world of love, are discussed and examined, from the viewpoint of its 'Metaphysical' manner and by the concrete comparison of *The Phoenix and the Turtle* with John Donne's poetry.

The Phoenix and the Turtle may be said to be too full of abstract ideas not in keeping with Shakespeare, too short of lyricism peculiar to him, and, in a sense, too puzzling a piece with various hidden secrets, but it is not too much to say that Donne's love-poetry can throw great light upon many of its enigmas.

It may be concluded that the theme of a miraculous absolute love, the mystic union effected by the birds, and the 'Metaphysical' conceits which make it difficult to have a thorough grasp of the poem, can be made clear almost in full measure by the comparison with Donne; that though Shakespeare and Donne are not necessarily alike in the treatment of logic in their works, yet the two great poets who tried to form their own identity in the Renaissance in which reason and belief, sanity and insanity, the powerful and the powerless, were thrown in a chaotic, heterogeneous, complex state, maintained the selfsame attitude toward the 'spirit of the age' in which they lived; and that it is this attitude that can furnish the true key to the solution of the mystery of *The Phoenix and the Turtle*.